

## 井戸替えに密着! 「谷の清水」



毎年8月の第1日曜は、年に1度の掃除の日。早朝から世話役が集まり、お地藏さんを清め、井戸の水を抜いて汚れを落とす



7 前日までに地下水をくみ上げるポンプを交換。当日は、井戸のふたをはずして水を抜くことからスタート。たまった鉄分とマンガンが混ざり、水はまっ茶色に



2 井戸の中に入ってゴシゴシ。「やりたい!」と、子供たちも参加。ふたを洗い、お地藏さんを清め……と作業が進む



3 洗い上がると浄化用の炭を洗め、新しい水を入れる

4 周囲に酒を振りまき、お供えを。1年間、よろしくお祈りします!



### ●特典 天王寺源氏堂

天王寺源氏堂の「亀かすて〜ら」25個入り500円を5個増量。西門店(写真)か中ノ門店に本誌を持参してね。1回限り。10年10月末まで(21日は除く)。西門店(四天王寺1-11-73 ☎06-6772-9556) 中ノ門店(四天王寺1-11-90 ☎06-6772-5270)



- 1 地元で愛される「谷の清水」
- 2 亀井堂の経木流し。「亀井水」は、白い石の間から玉のように清い水がわき出すことから、白石玉出水とも呼ばれた
- 3 四天王寺に移された「逢坂水」の井桁(いげた)
- 4 「安井の清水」は、社務所脇から見下ろす
- 5 よみがえった「金龍水」。柳谷観音聖寺の本堂横には銀龍水もあったと伝わるが、今は失われている

# 名水探して ぐるり 天王寺めぐり

生駒山からの伏流水がわき出し、古くから水に恵まれた大阪の天王寺界隈。名水を求めて、まち歩きに出かけた。 野口ゆうこ

**ま** ずは、今では珍しい現役の井戸「谷の清水」。江戸時代の地図や古文書にも記される由緒ある井戸だ。

世話役の内山宏之さんによると、「お地藏さん(清水地藏尊)と一体化した井戸。地元では清水井戸と呼んでいます。昭和の中頃までは、井戸は暮らして共にあった。飲んだり、スイカを冷やしたり……。寒い冬、温かい井戸水は、手洗いで洗濯するお母さんたちの強い味方だったという。生活水の役割は終えたが、今もお供えの水として欠かせない。

「1度でも使ったことのある子は、井戸を大切にしてくれます」と内山さん。世話役10人程が力を合わせ、井戸替え(掃除)などを通して次の世代に「まちの宝」を引き継いでいる。

**庚** 申堂の前を通過して四天王寺へ。お目当ては「亀井水」と「逢坂水」。

亀井水は、先祖供養の行われる亀井堂に、今もこんなとわき出している。亀の水盤から流れ落ちる聖水で、回向を済ませた経木を沐浴させるのだ。「亀井水は、金堂の下の青龍池から流れ来ると言われ、その源流はお釈迦様がおられたインドだと伝えられています」と、法務課長の兼子鐵秀さん。亀井堂では、亡き人の極楽往生を願う参拝客の姿が数多く見受けられた。

逢坂水は、元は一心寺の門前西にあった。明治時代の道路拡張工事で四天王寺へ。融通地藏や玉垣と共に、中ノ門近くの地藏山内に移されている。

**逢** 坂を西へ行くと、少彦名神と菅原道真公を祭る安居神社がある。同社は、大坂夏の陣における真田幸村戦死の地としても知られる。

境内の「安井の清水」は、子供に飲ませれば、かんの虫が静まる「かんしずめの井」とも呼ばれた。「戦前はお分けできたのですが、今は飲めません。くめるように修復できれば良いのですが……」と、宮司の中島一照さん。井戸へ降りる階段が閉鎖され、近付けないのが残念。社務所脇から草木の間に見下ろすことにした。

**天** 神坂のわき水の再現施設、増井の清水、玉出の滝を巡り、締めは、最近復活した柳谷観音聖寺の「金龍水」。眼病にご利益があるとされ、ほのかに甘い味わいが茶の湯でも愛された。明治天皇に献上されたともいう。水道の普及していない明治、大正期には、名水目当ての参拝客が多かったそうだ。

長く「枯れた」と言われていたが、2年前、副住職の浅野壮宏さんが井戸の底にわずかなよみを発見。「毎日くみ上げるうちにどんどんきれいな水が湧き出してきました」

昨年12月に井戸をさらって汚れを落とし、底のこぶし大の穴から水がわいているのを確認した。飲むことはできないが、いにしえの名水を求めて足を運ぶ人が増えている。